

# 睦公民館主催講座

# 万葉集を紐解く

時代を超えて今に訴えてくる万葉人の純粹な心

— 日本文学の扉を開いた大伴旅人の人柄と歌を詠む —

令和5年1月20日・2月17日・3月17日開催

つくしかだん 筑紫歌壇の中心人物である大伴旅人を取り上げ、

ほ 「酒を讚むる歌」 ばいか 「梅花の宴」 ほうさいばんか 「亡妻挽歌」 を味わいました。



三  
二  
講座

万葉集が出るまで我が国の書物は、中国の古典（漢文）の影響を強く受けた文体でしたが、大伴旅人が「和の文体（万葉仮名）」を用いたことによって、以降の日本文学が花開いたのです。旅人の漢文の知識が「日本人の心」と融合した結果と言えるでしょう。



お酒好きで知られる大伴旅人。「酒を讚むる歌」ではこんな歌を詠みました。

しるし 験なき ものを思はずは 一坏の 濁れる酒を飲むべくあるらし  
(無駄な物思いをするよりは一杯の濁り酒を飲むのがよいらしい)

さけ な ひじり おほ いにしえ おほ ひじり こと よろ  
酒の名を 聖と負せし 古の 大き聖の 言の宜しさ  
(酒のことを聖と呼んだ昔の大聖人の言葉のよろしさよ)

二つ目の歌に出てくる“聖”にちなんだお酒が販売されているそうです。

三  
二  
講座